

Title	ICTによる新たな教育実践 : 大阪大学SDGs国際学生交流プログラムの開発
Author(s)	李, 明; エンクトウル, アリウナ; 張, 希西
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2023, 27, p. 95-102
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90849
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ICTによる新たな教育実践

—大阪大学SDGs国際学生交流プログラムの開発—

李明*・エンクトゥル アリウナ[†]・張 希西[‡]

要 旨

2022年度大阪大学グローバルイニシアティブ機構はICTによるオンライン教育及びPBLの学習モデルを活用し、SDGs国際学生交流プログラムの開発・実施を行った。このプログラムは以下の4つの主要な目標を掲げた。1) 問題解決力と行動力の育成、2) 革新的な思考、創造性及びデジタルスキルの向上、3) グローバルコミュニケーション能力の育成、4) パートナー大学間の連携と学生交流の促進。

本稿の目的は、新たな教育実践である「大阪大学SDGs国際学生交流プログラム」について、開発の経緯と実施効果、そして今後の課題と展望を報告することである。

【キーワード】 国際学生交流、オンライン、ICT、グローバル人材育成、SDGs

1 はじめに

気候変動、エネルギー、人口動態の変化など、相互に関連する地球規模の課題に影響される中、世界の大学は教育、研究及び社会貢献活動（大学の「第三の使命」とも呼ばれていること）を通じて持続可能な発展に貢献することにますます重点を置くようになってきている。同様に、大学はその国際化活動を、地球規模課題の解決に貢献する社会的責任と整合させることが求められている（Jones et al., 2021）。

ユネスコによる最近の報告書（UNESCO IESALC, 2022）や少数の大規模な実証研究（Baroni et al., 2019 など）は、高等教育においてICT（Information and Communication Technology, 情報通信技術）を有効に活用し、物理的な学生の移動による環境への影響を軽減するバーチャル国際交流の機会の有効性を強調している。ユネスコは、世界38カ国の73の高等教育機関及び高等教育アライアンスによって実施されたバーチャル交流プログラムに関する14の事例を報告

し、バーチャル交流プログラムを受講した学生の大多数が将来的にも同様のプログラムへの参加に関心を持っていることを明らかにした（UNESCO IESALC, 2022: 7）。この14の事例のうち、学生の問題解決能力の育成や問題解決型の学習を目指したプログラムは2件のみであった。

問題解決型学習（PBL）とは、事実や概念を直接提示するのではなく、現実世界の複雑な問題を手段として用い、学生に概念や原理の学習を促進する教育方法である。PBLは授業内容のみならず、批判的思考能力、問題解決能力、コミュニケーション能力などの育成も促進することができる（Duch et al., 2001）。

このような背景のもと、2022年度大阪大学グローバルイニシアティブ機構はICTによるオンライン教育及びPBLの学習モデルを活用し、SDGs国際学生交流プログラムの開発・実施を行った。このプログラムは4つの主要な目標を掲げた。それは、1) 問題解決力と行動力の育成、2) 革新的な思考、創造性及

* 大阪大学グローバルイニシアティブ機構 特任助教

[†] 大阪大学グローバルイニシアティブ機構 特任助教

[‡] 大阪大学グローバルイニシアティブ機構 特任助教

びデジタルスキルの向上、3) グローバルコミュニケーション能力の育成、4) パートナー大学間の連携と学生交流の促進である。

本稿の目的は、新たな教育実践である「大阪大学SDGs 国際学生交流プログラム」について、開発の経緯と実施効果、そして今後の課題と展望を報告することである。

2 大阪大学SDGs 国際学生交流プログラムの概要

2021年度にグローバルイニシアティブ機構は、大阪大学創立90周年・大阪外国語大学創立100周年記念事業の一環として、“3 Minutes of Inspiration for Sustainable Development”をテーマとした国際学生動画コンテスト&フォーラムを企画・実施した。海外協定校の学生から多数の応募があり（10カ国から69本の動画作品）、動画コンテスト&フォーラムは大成功を取めた（李・エンクトゥル・張 2021）。

2022年度の新たな試みは、昨年度の動画コンテストと学生フォーラムに加え、SDGsの講義とシンポジウムを実施することで教育的な内容を強化し、4部構成の「大阪大学SDGs 国際学生交流プログラム」としてオンラインで実施することである。

このプログラムは、EXPO2025大阪・関西万博まで継続的に実施することにより、大阪大学の学生が海外の学生と協働して地球規模課題に取り組む機会を提供する。また、SDGsなどの社会的課題への関心を高め、解決案を構想する力を涵養し、異なる文化的背景をもつ人とのコミュニケーションができる国際人材を育成する。さらに、コロナ新時代におけるオンライン学生交流活動を推進することで、将来の優秀な留学生の受入や戦略的なパートナーシップの構築につながると期待できる。

4つの構成の有機的なつながりにより、一年間持続的に実施する国際交流プログラムを開発することができた。参加者限定のセッションに一般公開のセッションを加え、大阪大学の社会貢献にも注力した。

本プログラムの構成は以下の4部分である。

【第一部】

国際交流科目「グローバルとローカルのアプローチからSDGsを学ぶ」

日程：2022年8月22日～26日、8月29日（6日間）

使用言語：英語

単位：1単位

受講資格：大阪大学の学生、バーチャル学生交換協定がある海外協定校の学生、APRU¹⁾とAEARU²⁾加盟校の学生

定員：80名

受講生数：135名

【第二部】

“Let’s Take Action！”大阪大学SDGs シンポジウム

日程：2022年8月29日

使用言語：日本語（英語同時通訳）

対象者：一般公開

参加者数：305名

【第三部】

“3 Minutes of Inspiration for Sustainable Development”

大阪大学「学生動画コンテスト」

対象者：大阪大学及び協定校の学生、APRU、AEARU、U7 +³⁾加盟校の学生

事前エントリー締切：2022年11月13日

応募作品提出締切：2022年11月16日

応募作品数：92作品

【第四部】

大阪大学「動画コンテスト」表彰式&国際学生SDGsフォーラム

日程：2022年12月16日

対象者：一般公開

参加者数：131名

まずはプログラム全体の実施体制について説明する。図1で示している通り、2022年度大阪大学SDGs 国際学生交流プログラムは前述した4つの部分から構成されており、部分によって実施対象、協力機関及び対応手続に相違点があり、担当教職員は常に意見交換し、協力し合いながら実施した。

第1部である集中講義と第3部である動画コンテストは単位の発生またはサーティフィケートの発行と関わるので、大阪大学の学生、海外協定校の学生及びコンソーシアムの加盟校など、参加対象を限定した。第2部のシンポジウムと第4部のフォーラムは、地球規模問題は全員と関わることであり、誰でもその改善と解決に自分なりの貢献ができることを強調するため、SDGsと国際学生交流に関心を持つ誰でも参加できるようにと設定した。

大阪大学グローバルイニシアティブ機構の教員4名は主にプログラム全体の構築、各部分の内容のデザインとコンテンツ作成、集中講義に関するカリキ

キュラムとシラバスの作成、学生及び学内外協力教員とゲストスピーカーの選定、成績評価、各部分のイベントの実施を担当した。そして、国際学生交流課の職員は学生と学外協力講師の受入手続、プログラム各部分の学内外への周知、活動準備段階の各種支援と実施当日のテクニカルサポートを担当した。広報に関して、国際企画課の各部門からも多大な協力を得た。また、学内と海外の講師とゲストスピーカー、大阪大学同窓生の協力もこの一連の活動が順調に進んでいくことに助力した。

このような実施体制は大阪大学学内の教職員の協働のみならず、大阪大学と海外協定校、協力機関、コンソーシアム、大阪大学同窓生など、幅広く横連携の強化に貢献した。

次に、各部分の実施状況を報告する。

2-1 国際交流科目「グローバルとローカルのアプローチからSDGsを学ぶ」

大阪大学にはSDGsに関する講義が多数存在するが（2021年度で88講義）、そのほとんどは日本語で提供されており、英語で提供されているものは13%に過ぎない⁴⁾。これらの数少ない英語による講義は、ほとんどが大学院生あるいは開講部局限定の学部学生のみを対象としたものである（例えば：HUS International Undergraduate Program）。本講義は、学部・研究科の垣根を越えて、全学部生・大学院生を対象に、英語による学際的なSDGs入門コースと位置づけしている。

APRUやAEARU、他の協定校の多様な学生にこの

講義を提供することで、多様なグローバルな視点を授業に取り入れるとともに、世界に大阪大学におけるSDGsに関わる教育と研究を紹介することもできる。

このコースは、様々な分野で活躍する研究者や講師を招き、地域や地球規模の持続可能性の課題に取り組んだ経験や見解を共有することで、SDGsに対する理解を深めることを目的とする。講義とディスカッションを通じて、学生はSDGsのフレームワーク、そのグローバル、ローカルな意味合い、および行動の必要性について包括的な理解を得ることができる。このコースを学修した後、学生は1) SDGsとは何か、なぜそれが学生自身にとって重要なのかを説明できる、2) SDGsの17の目標のうち、3つ以上について説明することができる、3) グローバルな課題に対して、ローカルなアクションを提案する、4) 世界からの受講者と効果的なコミュニケーションを図る、以上のことができるようになる。第1部のコース受講と第2部のシンポジウムへの参加をすることで、第3部、第4部の動画コンテスト&フォーラムへの参加につなげ、学生たちは積極的な行動を起こし、自分たちのアイデアを世界に広めることを目指す。

また、コースでは大阪大学の学生とパートナー大学の学生と一緒に学ぶため、ローカルとグローバルの問題を比較しながら地球規模課題を考察する意識を学生に求める。

受講条件は原則としてすべての講義にリアルタイムで参加可能なこと、英語でのコミュニケーション能力があること（語学試験点数は問わない）である。

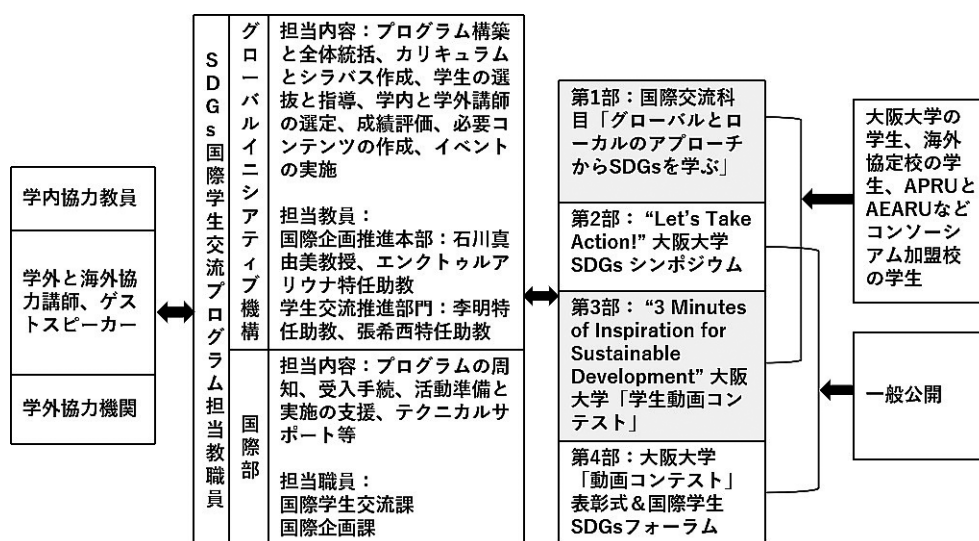


図1 プログラムの実施体制

英語コミュニケーション能力を向上させたい学生も歓迎する。また、SDGs、サステナビリティ、グローバルコミュニケーション、クリエイティブな作品制作などへの興味を必須とした。学生の専門分野は不問とした。

本コースの担当教員は、各セッションの講師と協力して、パネルディスカッション・セッションから反転授業まで、コースの構成を共同設計し、学生に豊かな学習機会を提供する。

この講義の特徴は、以下の4点である。

- 1) 専門分野を超えた学生にも理解しやすい入門レベルの講義を行う。
- 2) SDGsに関連するローカルな課題を提示しながら、グローバルな事例も取り上げる。
- 3) グループ・ディスカッションへの参加が必須。
- 4) 国レベルの課題や個人レベルの役割を討論することで、学生の行動を喚起する。

講義は以下の6回となっている。

- 第1回 インターアクティブ交流セッション
- 第2回 日本におけるジェンダーの問題
- 第3回 公平性と働きがいのある人間らしい仕事
- 第4回 気候変動とエネルギー
- 第5回 生物多様性と環境、多様な生物からの教訓
- 第6回 ディスカッションとまとめ
- 第7回 シンポジウム講義 “Let’s Take Action”

1回目はプログラムの紹介、シラバス、スケジュール、課題の説明及びSDGsの概要紹介を行った。学生の自己紹介とSDGsへの理解の部分において、Mentimeter⁵⁾を活用し、受講生からの回答を集めて、その場で共有しながら説明した。2回目は学生たちがグループに分かれ、これまでの人生をジェンダーの視点から振り返り、またこれからの人生で予想される課題や人生の選択について、話し合った。4回目の講義では、「反転授業」方式を導入した。講義の内容を事前に紹介し、授業時間は主に学生同士および教員とのインターアクティブ交流と議論に使った。6回目は大阪大学、ブリティッシュコロンビア大学、ガジャ・マダ大学からの学生グループによるSDGsの実践活動の発表後、全員でのディスカッションを行った。

学生にディスカッションボード(CLE)に最低1回講義内容に関連した意見を投稿すること、また、コース終了後にレポートを提出することを求め、成

績評価を行う。具体的に、授業でのディスカッションへの参加50%、ディスカッションボードへの書き込み20%、コース終了後のレポート30%となっている。学生は授業で学んだことを、自分の国や地域の特長や状況と比較しながら考察を深めることが期待される。

定員は80名であるが、学内外からの申込が多く、最終的に16カ国・地域の19大学からの受講生は136名となった。そのうち、大阪大学の学生は61名であった。しかも、あらゆる分野と課程を網羅しており、約7割は学部生である(図2)。また、男女の割合は女性66%と男性34%である。最終的に96名(71%)が合格・単位取得した。そのうち大阪大学の学生は44名(72%)であった。

専門分野	課程別			合計
	学部	修士課程	博士課程	
人文科学系	28	4		32
工学系(情報科学、応用科学)	20	9		29
理学系	9			9
医学・健康科学	10	4	5	19
社会科学系	27	8	2	37
不明				10
合計	94	25	7	136

図2 受講生のプロフィール

2-2 “Let’s Take Action” 大阪大学SDGsシンポジウム

シンポジウムの目標は以下の4点である。

- 1) 日本におけるSDGsの達成に向けた取り組みを学ぶ場を提供する。
- 2) 大阪大学の卒業生のSDGsに関わる活動の紹介を通して、学生や市民にインスピレーションを与える。
- 3) SDGsなどの社会的な課題への関心を高め、解決案の構想力を向上させる。
- 4) 大阪大学SDGs動画コンテストの広報を行い、参加を促す。

大阪大学とパートナー大学の学生・教職員を中心に、企業や研究機関等、16カ国・地域から305名が参加した。

当日、河原源太理事・副学長からの開会挨拶の後、国連広報センター所長根本かおる氏が「SDGsの現在地：解決策の担い手としてのわたしたち」をテーマとする基調講演をされた。その後、大阪大学の卒

業生による招待講演として、日野自動車株式会社先進技術本部副本部長の豊島浩二氏から自動車とSDGsの最新情報、サイボウズ株式会社代表取締役社長青野慶久氏から、「選択的」夫婦別姓の課題の講演、また、YOYOホールディングスCEO深田洋輔氏から貧困問題を解決するモバイルビジネスの創出、KISEKI Co. Ltd. CEO山田美緒氏からルワンダでソーシャルビジネスの挑戦をお話いただいた。SDGsの実践事例や経験を踏まえた講演を通して、シンポジウム参加者がSDGsについて学び、共に考える、大変有意義な機会となった。

2-3 “3 Minutes of Inspiration for Sustainable Development” 大阪大学「学生動画コンテスト」

動画コンテストは2年目を迎え、前年の経験をもとに、さまざまなチャンネルを通じて学内外にプロモーションを行った。最終的に、世界15カ国36大学から92作品もの応募があった(図3)。国数と応募数ともに昨年を上回り、動画コンテストの認知度が高まっていることがわかった。全ての応募作品は“OU Student Video Contest” YouTube⁶⁾で公開している。

図4に示されているように、応募作品は社会、経済及び環境など、様々な側面からSDGsへの学生の関心の高さを示した。特に、「SDG12: つくる責任つかう責任」、「SDG3: すべての人に健康と福祉を」、及

国・地域	動画数	大学数
インドネシア	24	4
中国	21	10
マレーシア	14	3
日本	13	3
フィリピン	5	4
ベトナム	4	3
スペイン	3	1
ロシア	2	1
ブラジル	1	1
ブルネイ	1	1
ドイツ	1	1
モンゴル	1	1
ミャンマー	1	1
オランダ	1	1
ウクライナ	1	1
合計	92	36

図3 動画コンテストの応募作品

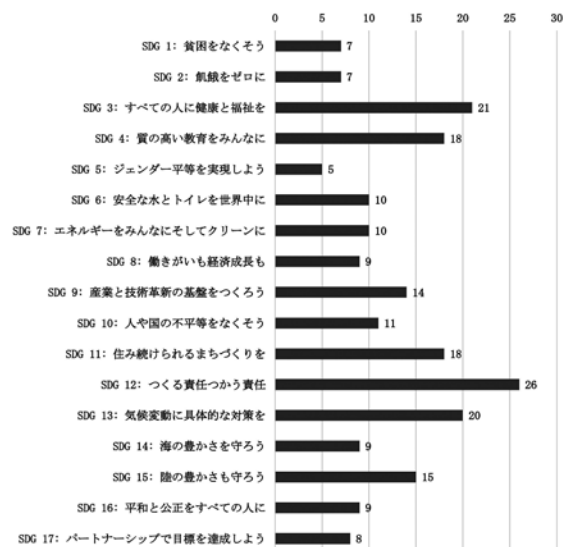


図4 動画作品が関連するSDGsの目標

び「SDG 13: 気候変動に具体的な対策を」への関心の高さがうかがえた。

2-4 大阪大学「動画コンテスト」表彰式&国際学生SDG学生フォーラム

当日は、学内外の審査員から選出された優秀作品の表彰式に先立ち、河原源太理事・副学長からの開会挨拶及び2025年大阪・関西万博に向けて大阪大学のSDGs活動の講演の後、グローニンゲン大学 Campus Fryslan 学部長である Andrej Zwitter 教授から“FUTURE of SDGs-2030 ONWARDS!”というテーマの基調講演が行われた。

続いて行われた表彰式では、関西 NGO 協議会連携促進アドバイザー高橋美和子氏から「映像創作賞」、元国際連合食糧農業機関 (FAO) 欧州・中央アジア地域事務所副所長庄司ゆりこ氏から「SDGs アイデア賞」、河原理事・副学長から「最優秀賞」及び「総長奨励賞」等の発表があり、計14作品がそれぞれ受賞した。後半は、昨年受賞したグループによる発表が行われた後、2名の大阪大学の学生による司会進行のもと、受賞学生らによるパネルディスカッション形式の意見交換が行われた。最後に、西尾章治郎総長から閉会の挨拶として、受賞者への祝辞と参加に対するお礼が述べられ、盛況のうちに幕を閉じた。本フォーラムには、国内外から131名の参加があり、オンラインによる対話を通して、世界中の学生がSDGsについて共に考える素晴らしい機会となった。

3 プログラムの実施効果

3-1 教育

受講生へのアンケートを実施した結果、「このコースのなかのレクチャーの質はいかがでしたか」の質問に対して、95%以上が「高い」もしくは「良い」と回答している（図5）。

また、「このバーチャル留学の受講経験を踏まえて、大阪大学に留学してみたいと思われますか」の質問については、85%の協定校の学生が大阪大学に留学したいと答えた（図6）。

コースに対する具体的な評価は以下の通りである。この結果から受講生は概ね満足感を得て履修したことが示された（図7）。

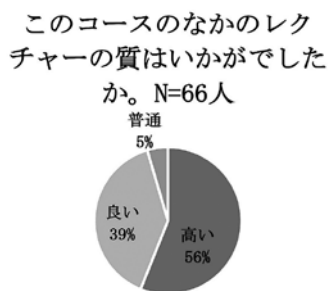


図5 コースのなかのレクチャーの質

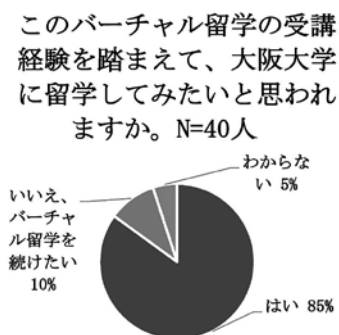


図6 将来大阪大学への留学意欲

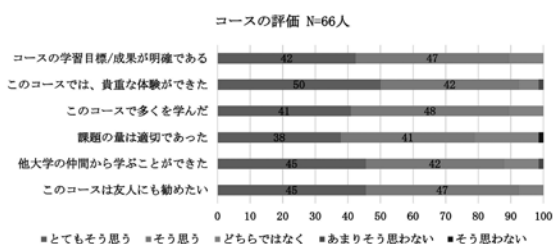


図7 コースの評価

また、受講後の感想も尋ねた。その回答内容を一部抽出したものを以下に挙げる。

SDGsのことをより深く勉強することができて、とてもよかったです。また、ディスカッションの時に、協定校の大学生の方々と意見交換を通して、各国のSDGsに関する取り組みの状況等を知ることができました。また、学生の多様な考え方やクリティカルシンキングによる議論中の発言などに、多くの刺激を受けました。

リスニング力を鍛えることができ、英語で自分の意見を伝えるということも積極的に取り組めるから。また、海外の他大学の生徒と交流できるから。

I like the group discussion best. We have different ideas, and course discussion provide a chance for us [to discuss]. We assign [ed] reporter, moderator, that fostered teamwork. My groupmates were open-minded, telling me about recycling in Japan, gender issue.

このように、ディスカッションで異なる国の学生との意見交換、及び英語の能力の向上に言及するものが多い。この講義は世界に開かれた学生交流の場を作ることができたと言える。さらに、海外協定校の学生と共に学び、高め合う機会を作ることによって、大阪大学の学生の視野を世界に広げ、国際性を涵養することができた。

3-2 シンポジウム

シンポジウムの満足度は87%であった（図8）。

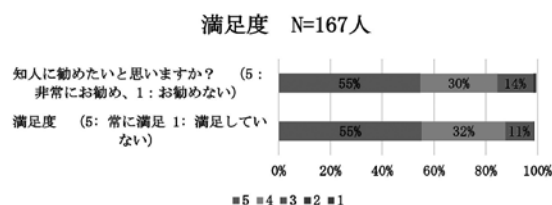


図8 シンポジウムの満足度

参加者からのコメントを一部抽出したものを以下に挙げる。

素晴らしかったです。副学長、また国連の根本さん

のご講演でSDGsの基本と課題を確認した上で、各卒業生の皆さんがテーマを絞ってスピーチされた内容は、本当に濃密で楽しかったです。多くの学びをいただきました。何と言っても体験をもとにSDGsを語られた企画が良かったと思います。

世界の中の日本がSDGsでどのような立ち位置にいるのか、今後企業としていかに自分事としてうごいていけるかがポイントであることなどがわかった。

I love that the speakers are experts in their fields and as an adviser of a Philippine student organization, the symposium is a guiding light for us to understand the diverse issues of the world and how we can address these issues through the UN SDGs.

I am very thankful that I joined an event like this in which I gathered lot of knowledge. Even though we speak different languages, the technologies still give us the opportunity to interact and share our knowledge in our own language.

以上のように、国内外からの参加者はシンポジウムの内容に満足している。特に、海外の学生は、オンライン形式と英語での同時通訳を通じて、日本のSDGsについて学ぶことができる貴重な機会となった。また、同窓生やパートナー大学との絆を深め、大阪大学の国際的なレピュテーション向上に貢献した。

3-3 動画コンテスト表彰式&国際学生フォーラム

実施後のアンケート結果により、このイベントに満足している参加者の割合はかなり高く、97%であった。

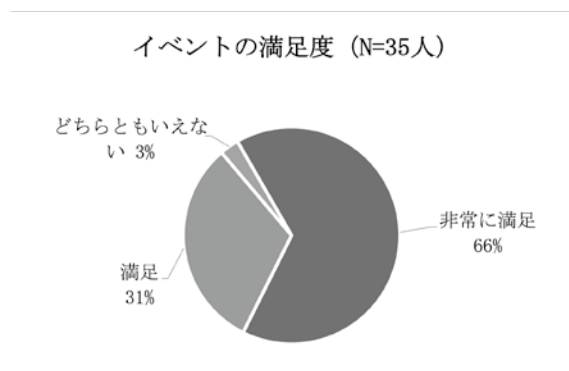


図9 イベントの満足度

また、参加した学生から以下のようなコメントが寄せられた。

The opening movie was amazing. The presentations by the presenters were also very good.

I attended this session as an observer to get ideas and inspiration from the contestants who participated in this year's contest. I was really surprised to see all the videos that have won awards and the quality of work done by these young and aspiring students. I hope that this contest will be continued next year and that my students can contribute and participate in the contest as well.

I did enjoy all of the contents. I was particularly impressed by the movies students created for the contest and the way they tackle the serious problems. Prof. Zwitter's talk was also very inspiring. He offered an ideological background when we argue why and how SDGs are important in our present society. I think that this will be more and more important for every concrete action for SDGs.

このプログラムを通して、地球規模の課題に対する若い世代の意識を高め、解決を構想するデザイン力、自由に表現する創造性、チームで行動する意識を高め、グローバルな人材育成に貢献することができた。

4 今後の課題と展望

まず、講義の内容をさらに充実させる必要がある。SDGsをローカルとグローバルの両方の視点から学ぶコースであるため、一年目は主に日本に焦点を当てたが、二年目からはさらに海外の専門家を招いてグローバルな視点からSDGsを議論する。受講生から「もっと議論の時間をとってほしい」という声があるため、今後は講義の一部をオンデマンドビデオにして事前に視聴できるようにし、議論の時間を確保することも検討する。また、このプログラムを開発した際、各部分は比較的独立しているが、より多くの学生が全体を通してすべての部分に参加できるように、特に講義を受講した後に動画コンテストに参加できるようにすることが望ましい。今後の講義

には、学生が次のイベントに積極的に参加できるよう、動画制作スキルの授業を取り入れ、プログラム全体の各部分がより有機的に統合されるように設計する必要がある。さらに、このプログラムへの参加に対する学生の関心を強め、参加への準備をするために、対面式のワークショップを企画したいと考えている。

また、学生フォーラムはプログラムの最終イベントとして、プログラムの参加学生がディスカッションを行う良い機会である。オンラインのメリットをさらに生かし、もっと多くの参加者に発言できる機会を与えられるように、ブレイクアウトルームやMentimeterを活用したい。より有意義な議論を行うために、有識者を招いて議論する必要がある。また、物理的移動の制限が緩和されているなか、学生交流活動が徐々に再開されているため、将来的にはオンラインとオフラインを組み合わせたプログラムにしたいと考えており、プログラム管理・運営が課題となっている。

本プログラムは、コロナ新時代の国際的な人材育成と国際交流の新たな試みであり、開発と実施から得られた多くの経験は、今後のオンライン・オフラインを問わず、さまざまな形の国際教育や国際交流の展開に応用できるものである。これをモデルとして、さらに短期間の交換留学プログラムを開発し、国際的な人材の育成や海外提携校との交流を進め、将来的には長期的な海外との学生交流や留学生の受入を促進したいと考えている。最後に、現在、プログラムの運営費は大学が負担しているが、将来的には、企業や関連団体との提携やプログラム費用の徴収により、プログラムの自走を目指す。

謝辞

本プログラムの企画・実施にご協力いただきました、教職員・学生の皆様に感謝いたします。

注

- 1) APRU (The Association of Pacific Rim Universities). <https://apru.org> を参照。
- 2) AEARU (The Association of East Asian Research Universities). <https://www.aearu.com> を参照。
- 3) <https://www.u7alliance.org/partners/> を参照。
- 4) 大阪大学シラバスを参照した。
https://koan.osaka-u.ac.jp/campusweb/campussquare.do?_flowId=SYW4201600-flow&locale=ja_JP
(2022. 12. 28 閲覧)
- 5) Mentimeter は、PC やスマホで参加者からのレスポンスを集めることができる Web サービス。
<https://www.mentimeter.com/>
- 6) <https://www.youtube.com/@OUSTudentVideoContest>

参考文献

- 李明・エンクトゥルアリウナ・張希西 (2021) 「オンラインにおける大阪大学の国際学生交流の取組み：SDGs の実践でグローバル人材育成に向けて」『大阪大学高等教育研究』第10号, 13-20頁。
- Baroni, A., Dooly, M., Garcia, P. G., Guth, S., Hauck, M., Helm, F., ... & Rogaten, J. (2019). Evaluating the impact of virtual exchange on initial teacher education: A European policy experiment. Research-publishing.net.
- Duch, B. J., Groh, S. E., & Allen, D. E. (Eds.). (2001). *The power of problem-based learning*. Sterling, VA: Stylus.
- Jones, E., Leask, B., Brandenburg, U., & de Wit, H. (2021). Global social responsibility and the internationalisation of higher education for society. *Journal of Studies in International Education*, 25 (4), 330-347.
- UNESCO IESALC (2022). Moving minds: Opportunities and challenges for virtual student mobility in a post-pandemic world. Retrieved from:<https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000380988>